

びわこの 考湖学

3

馬と船が集う「ターミナル」

代では東山道が通ります。すなわち、六反田遺跡は、東山道と琵琶湖がもっとも近づくところに営まれていたことがわかりました。

二の畦遺跡や、白鳳時代に建立された益須寺跡があり、犬上川を渡河する推定東

山道から約500m下流に

ある竹ヶ鼻(廃寺)遺跡では、奈良時代から平安時代の多くの建物跡がみつかり、多量の白鳳時代の瓦類が出土していることや礎石がみられることから、白鳳時代に寺院が建立されていた可能性も考えられています。両遺跡ともに、川津と

東山道と矢倉川が交差する結節点まで川船が遡上していた可能性が高く、都や東国から多くの人や物が集まり、ターミナル的性格の強い集落であったといえます。

路との結節点に設けられた川津には人や物が集まり、湖上や水上交通を管理する公施設が必要になります。その意味でも陸上交通と湖上交通が交差し、また、結節する北陸道や東山道など交通の要衝に設けられた駅家は、水駅の機能を兼ね備えた施設であったことは十分考えられます。

また、湖東と湖南では、琵琶湖へ注ぐ河川と東山道や東海道が交差する結節点は、渡河場所であるとともに、河川を下るための川津(港)が設けられていた可能性ががあります。

養老律令の解説書である「令義解」の厨牧令水駅の条には水駅の設置が規定されており、「延喜式」の記載から、出羽国に馬と船を置く水陸兼送の水駅が存在したことが指摘されています。

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

こに注ぐ河川を利用した水上交通は、大津宮時代ごろにはすでに確立し、奈良時代には官道の水陸交通システムが整備され、平安時代には交通・物流・情報のネットワークが完成されたといえるでしょう。近江は水の国・道の国であったので(滋賀県文化財保護協会 葛野泰樹)

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

河川の港

また、湖東と湖南では、琵琶湖へ注ぐ河川と東山道や東海道が交差する結節点は、渡河場所であるとともに、河川を下るための川津(港)が設けられていた可能性ががあります。

近江では、湖上交通や水上交通が発達しています。その寄港する津や陸路と水

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

野洲川を渡河する推定東山道周辺には、奈良時代後半の建物跡と「川原」銘の墨書土器が出土した守山市

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる

彦根市の六反田遺跡。東山道で運ばれた物資を積み込んだ舟が、写真中央の川から入江内湖を抜け、琵琶湖へと漕ぎ出していったと考えられる



かつて琵琶湖畔には、水路や運河を張り巡らせた水郷があり、隣家や水田に向かうにも、船を移動、運搬手段に使っていました。しかし、昭和30年代以降の陸上交通の発達によって、ほとんどの水路は埋められ、道路になっていきます。また、内湖は干拓され、その数は3分の1以下まで減っています。

今ほどスピードが求められない時代においては、琵琶湖と琵琶湖に注ぐ河川は、船によって最も早く大量に、人や物資を運ぶ優れた交通手段として、重要視されていました。これらは、いつまでさかのぼるのでしょうか。

最近、彦根市六反田遺跡

最近、彦根市六反田遺跡